

IATSS三十周年によせて

お国柄と交通問題—「国際」交通安全学会のテーマ

岸井隆幸 日本大学理工学部教授



1977年東京大学大学院修士課程(都市工学)修了、同年建設省に入省。都市計画・都市整備分野の行政に携わった後、92年建設省を退職し、日本大学理工学部土木工学科専任講師、95年同助教授、98年同教授、現在に至る。

JICA(国際協力機構)が実施している集団研修の一つに「総合都市交通計画&プロジェクト」というプログラムがある。このプログラムは発展途上国の研修生が東京幡ヶ谷にあるJICA東京国際センター(TIC)に集まり、約2か月の間、集団で都市交通計画の立案技術やプロジェクト技術の研修を受けるものであり、毎年20か国前後の国々から二十数名の参加者がある。私は現在このプログラムのコースリーダーとして、プログラムの編成や研修生の選抜、そして講師として講義をし、最初のオリエンテーション、研修生が行うカントリーレポート発表会、研修最後の最終レポート発表会、プログラム自体の評価会と、結局、毎年10日以上はTICに通っている。はじめは緊張気味の研修生たちも時を経るにつれ親密さを増し、いつも最後のフェアウェルパーティーでは集合写真の嵐、名残を惜しむメンバーが最後まで残って語り合っている。私自身、このプログラムに関わり出した10年前はおっかなびっくりで戸惑うことも多かったが、今ではいろいろな国の参加者のさまざまな意見や質問に遭遇して、改めてわが国の交通問題の特質や交通問題の国際性を再認識することを楽しみにしている。

20か国も集まるといささか大げさではあるが、部屋はミニ国連の様相を呈してくる。なぜかいつも仲良く寄り添っているペアがあるかと思えば、時には悪い人間関係も見え隠れする。そして「人それぞれ」とはいうもののそれ以上に「国民性の違い」は強固であり、民族の底流に流れる文化・価値観はどれも個人差を越えているようである。毎年研修生の顔ぶれは変わるが、いつもアジアからの参加者は総じてシャイな人が多く、ラテン系中南米からの参加者、特に女性の活発さは目を見張るものがある。こうした「国民性の違い」がおそらくは交通問題に大きな影響を与えているのだろうと思うものの具体的に論証するのは容易ではない。「国際」交通安全学会の大きなテーマかもしれない。

また、時代の変化、発展途上国の地位の向上という流れも微妙に感じられる。例えば、10年前にはほとんど宿舎から出ることなく一生懸命お金を節約して帰国しようとする人も多かったが、最近は発展途上国とはいえさまざまなチャンスを捉えて積極的に活動する人が多くなったように思われる。彼らにとって「秋葉原」は日本で最初に行くべき場所であるようで、しばらくすると皆、真新しいカメラを抱えて登場するのである。

交通問題に関する議論もさまざまな様相が出てきている。研修場所が日本だからといって必ずしも日本の手法だけが手本となるわけではなく、南米で積極的に取り組まれているバスを中心とした手法やアジアで盛んなパラトランジットが大きな話題を呼ぶこともある。ただ総じていうと、時代はあまりに性急で、すべてを押しつけて一気に自動車社会に飛び込んでしまっている国が多いのは事実である。本来、それぞれの国には国民性を反映し、社会の発展段階に応じた独自の流れがあってもよいのではないだろうか。お国柄を反映した交通システムの追求、これもまた「国際」交通安全学会のテーマかもしれない。